



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY
明治学院大学 機関リポジトリ

あんげろす第60号

著者	大西 晴樹, 遠藤 興一, 水落 健治, 今村 正夫, 高井ヘラー 由紀, 下田 好行
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュースレター
巻	60
発行年	2013-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10723/1831

あんげろす



「つなぎ」プロジェクトについて

学院長 大西 晴樹

「明治学院一貫教育宣言」により様々な一貫教育の試みがなされている。ところが、建学の精神の中心にあるキリスト教教育の一貫教育は困難をきわめている。キリスト教教育とは、学校礼拝・キリスト教科目・キリスト教課外活動から構成されるが、一貫教育として、これといった成果を産んでいないように思われる。高校時代にチャペルで耳を傾けていた移行生は、大学に入るやチャペルから足が遠のく。両高校には大変すぐれたハイグリー部とハンドベル部があるが、それらが大学のクラブにつながっていない。各学校の現場においてキリスト教教育は懸命になされているのに、その成果が輪切りになっていて、高校生を経て大学生、そして社会人となる明学生個人の人間的成長とつながっていないのではないか。このような現状を打開するため、法人のキリスト教活動推進会議を中心に「キリスト教高大接続プロジェクト」、通称「つなぎ」が始まろうとしている。



第 60 号
2013 年 3 月

遠藤興一

その筋から“何か書くように”というお達しがあった。“へえい”と応えはしたものの、さて何を書いたらよいのやら。ようやく互酬性 (reciprocity) という言葉に突きあたった。ちなみにこの言葉を辞書で拾うと、「個人ないし集団間で、互いに物品や役務などを交換すること。古代や未開社会の贈与慣行を研究する際に、義務的性格に着目してつくられた分析概念」(大辞林) のことだとある。社会福祉に関連する別の説明によると、「無償性の原理に基づいて展開されたボランティア活動について……近年、有償性の原理が社会福祉に介入すると、そこではギブ・アンド・テイクの原則に則った活動が多く展開される。ボランティア活動の有償化である。地縁、血縁関係を基盤とする援助が無償性の伝統的な典型だとすれば、ここにも資本主義社会の市場交換原理が介入して、貨幣を仲立ちとする交換行為が、互酬性の原理として機能する」(エンサイクロペディア社会福祉学) としている。俗にいう互いに助け合うことであるが、「互助」、あるいは「共助」とみる向きもあることだろう。あるいはここにボランティア活動を読み込む人も少なくない筈だ。こうした理解の在り方に棹さしてみたい。例えば互助は相互扶助、つまり助けられたり、助けたりする (for) 行動連環を想定するなら、共助とは共生と結びついて、共に (with) 活動することである。前者は対面的な関係にあるが、後者は並列的な協働関係にあり、一方は援助の主体と対象の間に第三者が介入しない「あなたとわたし」の関係なのに対し、他方は主体と対象が横並びに同一方向を見て協働する関係にある。そしてそれは、外に向かって開かれてもいる。

話はここで一転。筆者がはじめてボランティア活動をやっていた 50 年近く前の活動原則は無償性 (無償の行為) が前提とされ、一切が手弁当の世界であった。誰もそれがあたりまえのことと信じていた。やがて 1980 年代からこっち、有償性という原則が少しずつ介入するようになり、今日では何らかの意味で「見返り」があること、つまり有償 (有料とは少し違う) が原則化するようになっている。それは別名、互酬性ともいわれ、ボランティア活動の原則に組み入れられた。さて、ここにキリスト教の話題をつなげてみたい。奉仕 (サービス) という言葉がある。献身、献金といった概念とのつながりもあって、しばしば用いられている。ここに有償、無償の考え方を重ねてみると、天に宝を積む行為という見返りの意味は別にしても、大抵はこの地上において、見返りがある、あるいはお返しを求めることとは考えない。つまり無償性の世界なのである。そこで例えばこういう話がある。A という人物が無償性の原則によって

働き、Bという人物が有償性の原則によって働く場合、両者の活動は同一現場で、同一内容のものであるとしよう。そんな関係が数か月、いや数年と続いた場合、AとBの関係、あるいはA、Bそれぞれの活動に対する姿勢や内容に何等変化は生じないと言えるだろうか。“私は私、あなたはあなた”、別々のことだからと割り切れれば多分問題は起らない筈である。だがお互いに生身の人間、本当にそのまま、何も起らないと言えるのか。いってみればコトは心の在り様、精神的な理解、信仰的充足の証し、ある人にとっては心理的な得心、ある人にとっては信仰的な納得と考えて説明はつくのだろうか。そうなのかも知れない。事実、そう語って淡々と無償の活動を何年も続けているクリスチャンを筆者は何人も知っているから。だが、と思うのである。皆が皆そうなのか、本当にその理解でよいのか、と。私が問いたいのは次のようなことである。問題を個人の内面的、あるいは信仰の事柄としてかたずけて良いのか、それは問題状況を「解消」することではあっても、問題そのものを「解決」することにはなっていないのではないのか。有償性と無償性の原則の間で揺れ動き、とまどっている人々にとって、それは答えになっていないということである。そして、ここに二元論の陥穽があると思う。両者をつなぐ、架橋の論理（社会倫理）が欠如していること、そしてキリスト教の言葉でいえば、無償性という宗教倫理が有償性（互酬性）という世俗倫理と切り離されていることの問題性である。受肉化し、内側から世俗倫理を変革していこうというオリエンテーションを捨象しているという問題である。そして、現象面から察するに今や少数派となった無償性の原則主義者は、ボランティア活動の現場において、いたるところ、様ざまな場面で「浮いている」。確かに周囲から尊敬はされるが、本音で語り合える「仲間」としてのコミュニケーションを育てる方向にはむかっていかない。そこでついつい、聖書が語る「地の塩たれ」とはいったいどういうことなのかと考え込んでしまう。この問題は今日、キリスト教社会福祉の全般状況にも及んでおり、二元論の陥穽からどのようにしたら抜け出せるかというテーマと、その拡がりの大きさに思い至る。世俗の世界に対していつも高踏的であってはいけない。が同時に世俗の世界に全く埋没してしまつたらもともこうもない。今日、キリスト教社会福祉は埋没することを恐れずに、この世俗の論理（互酬性の世界）と対峙し、そこに踏み出していくことが必要ではないのだろうか。そのためには架橋の論理（社会倫理）を構築することが切に求められる。駄足をひとつ。社会福祉は今や、国の政策から介護事業の現場に至るまで、市場性の原理と有償、有料化の滔々とした流れのなかに置かれている。無償性の原則はまさに消え去らんとしている現実が見てとれる。だが思う、だからこそ逆説的に言えば、そういう今日だからこそ無償性、互酬性の原則が持つ意味を今一度根底から見直すべき時なのではないか、と。

えんどう・こういち（所員）

「キリスト教の基礎」の26年

水落 健治

2週間ほど前、キリスト教研究所所長の渡辺先生より『あんげろす』の原稿依頼をいただいた。推察するに、渡辺先生は、私がこの3月で退職することをお知りになって、在職期間中の思い出か何かを書いてほしいと考えられたように思う。何を書こうかとあれこれ考えた結果、明治学院に在職していた間ずっと教え続けて来た授業「キリスト教の基礎」のことを書くことが、後進のためにも役に立つのではないかと思うに至った。この授業(旧名「キリスト教概説」)を教え始めたのは1987年なので、かれこれ26年間この授業を教え続けて来たことになる。少々長い原稿になってしまったが、退任教師の遺言と思って読んでいただければ幸いである。

*

*

今年の授業は1月11日(金)が最後だったのだが、この授業が終わったとき、ひとりの女子学生(経営学科)が次のようなリアクションペーパーを書いて来た。

最後の授業おつかれ様でした。最後のリアペで、授業とは関係のないことを書くのですが、どうしても先生に伝えたいので書かせてください。先日『レ・ミゼラブル』を観てきました。映画はとても素晴らしくて、でも難しく内容をすべて理解することはできなかったけど、ヒュー・ジャックマン演じる主人公の盗人が仮釈放中に教会で盗みをはたらき、警察につかまり教会へ連れ戻された際に、司教は彼が盗んだということは言わずに「私あげた」と彼をかばったんです。その時に「忘れないでください。これは神の御心です」と言っていて、それを聞いたとき彼は、そのあと神の前にひざまずき祈り、回心して、これまでからは想像もつかないくらい善人になったんです。映画の中で、とはいえ、彼の回心の瞬間とその後の人生(?)を目にすることができてすごい感動しました。

授業が終わってホッと一息ついた中でこの感想を読んだとき、私は、この学生が私の伝えたかったことを十分過ぎる位分かってくれたことを知って、涙が出るほど嬉しくなった。私がかれまでの「基礎」の授業の中で努力して来たのは、

1. 宗教としてのキリスト教が語る思想・教義(絶対他者としての神、神の似像として創造された人間とその墮罪、キリストの十字架による贖罪死、回心)を正確に伝えること

2. ヨーロッパやアメリカの政治体制や文化の中には、その隅々に至るまでこの思想が浸透していることを、具体的な事実を通して学生に伝えること(授業では、自然科学の成立、王権神授説とピューリタン革命、宗教改革と義務教育制度の成立、ニーチェの哲学、アメリカの大統領制度、南北戦争、E.プレスリーのロックンロールなどを取り上げた)

3. したがって、ヨーロッパやアメリカのことを理解するためには、キリスト教の教えを理解することが不可欠であることを学生に納得させること

という三点だったのだが、上記の学生のリアクションペーパーは、この私のもくろみがほぼうまくいったことを示していたからである。

*

*

大学に入学して初めて私の授業に出てくるとき、学生たちの表情は様々である。本命の大学を落ちて滑り止めで明治学院に入って来た学生、「宗教は民族の対立抗争を引き起こすだけだ、自分とは関係ない」と思っている学生、「自分は宗教の勉強をするつもりで大学に来たわけではないのになぜこの授業は必修なのだ」と訴える学生、「高校での聖書の授業は全然面白くなかった」と思っているキリスト教主義学校出身の学生。--このような学生たちの先入観を砕き、授業の必要性を自覚させ、さらにキリスト教の語るところを自らの「実存」の問題との関連で考えてもらうまでにするためには、教師の側に相当な力量が要求される。狭義の神学や聖書学の知識のみでは到底不十分で、哲学や歴史、さらには自然科学に至るまでの広く深い教養が必要とされるのだ。ここ数年私は、「自分は、神などという眼に見えないものの存在は信じない」と突っ張る学生にたいしてはこう語ることにしている---

「じゃあ君は、紀元 1600 年に関ヶ原の戦いが起こったことも信じないわけね?」。

この私の問いかけは、私の専攻する哲学の一領域である「認識論」の背景から来るものであるが、学生はこのように問い掛けられると、思いもかけない方向からの攻撃

に大抵黙ってしまう。ある程度理解力のある学生ならば、大抵の場合、このやりとりがきっかけとなって、「知識って何だろう」と自問自答し始めるようだ。そんなこんなで、「基督教の基礎」の授業は真剣勝負だ。学生が違えば出てくる質問も違う。教えつづけていると、過去に出た質問がまた出てくることも多いが、毎年必ず幾つかは新しい質問が出てくる。『ダ・ビンチコード』がベストセラーになったときには、「イエスに妻がいたというのは本当ですか」という質問に一年中悩まされ続けた。「基督教の基礎」は「教師を悩ませ鍛える授業」といってもよいかもしれない。

*

*

だがその一方で、この26年間、私がずっと考え続けてきたことがある。それは「大学という学問探求の場で基督教の教義だけを教えてよいのか」という問題、正確に言えば「聖書学の研究成果を授業で教えなくてもよいのか」という問題である。この点について改めて振り返ってみると、私は、この26年で少しずつ聖書学の成果を授業に取り入れて来たように思う。そしてここ数年の授業では、その成果を可能な限り正確に学生に伝えて来た。具体的には次の諸点である。

1. 近代聖書学が始まってからのイエス研究の歴史。特に「伝承史」という方法の開拓と様式史学派の貢献。
2. 福音書の成立に関わる「二資料説」--- 「マルコ福音書」の優位と言葉資料 Q。
3. イエス時代のガリラヤ地方の政治的・経済的状況 (投機による土地の高騰、自営農民の没落。重い税。日雇い労働者の増大)。
4. パレスティナにおけるヘレニズム文化の圧倒的優位の中でイスラエル民族のアイデンティティを守る三つの形態としてのユダヤ教サドカイ派、パリサイ派、エッセネ派。
5. イエスは、おそらくガリラヤのナザレの出身である。「ベツレヘムにおけるイエスの処女降誕」は、旧約のメシア伝承との整合性を保つために、第一次ユダヤ戦争 (A.D.70)の後に成立した伝説にすぎない。
6. イエスが語った「貧しい者は幸いだ」等の言葉は、彼が徹底して搾取される人々

の側に立ったことを示す。彼はこの意味で「逆説的反逆者」(田川建三)である。

7. イエスが行った奇跡には、(a) 歴史的根拠に乏しい後代の尾ひれ (e.g. 「水の上を歩く」 etc.) と (b) 歴史上の核をもつと考えられるもの (e.g. 「病人の癒し」 etc.) とがある。

8. 歴史上のイエスが行った「病人の癒し」などの奇跡は、現代的観点からすれば必ずしも奇跡でないものも多い。

e.g. マルコ 5.1ff. の「ゲラサの悪霊つきの悪霊が 2000 匹の豚の群れに乗り移った」という奇跡は、「悪霊つき本人が豚の群れに向かって走って行ったので豚が驚いて湖に落ちた」と考えれば奇跡でも何でもない

9. イエスのエルサレム入場と「宮清め」は、マカベア戦争の際に行われた宮清めを想起させ、したがって「現行のエルサレム神殿体制に対する批判」という政治的脈絡の中で行われた。

10. イエスは「最後の晩餐」の時点で、おそらく自らの死を予期していた。そして自らの死後の「神の国運動」の担い手として、この席上で 12 弟子を選任した。

11. イエスの十字架上の言葉「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ(わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか)」は、「神の国運動の挫折」を示す「イエスの絶望の言葉」とも理解される。

12. イエスの死後、その遺体が墓から消滅したのは歴史的事実と考えられる。(カンペンハウゼン「空の墓」)

13. 「イエスの死者からの復活」および「イエスの十字架刑を全人類の原罪の贖罪のための死と捉える思想」は、十字架刑の際に離散し、自らの師の遺体にまみえることすらかなわなかった弟子たちが、極限の「自責の念」と「苦悩」に直面した結果成立した「喪の作業」(フロイト)である。(佐藤研『悲劇と福音』)

これらの諸点を学生にストレートに伝えることについて、当初私にはかなりのためらいがあった。というのも、一方でキリスト教の「教義」を伝え、他方でこれと異なる「歴史上の人物としてのイエス」を伝えるということは、現代のキリスト教研究が

抱えている「史的イエスと信仰のキリストとの乖離」という矛盾をそのまま学生に伝えることになるからである。

*

*

だが26年間「キリスト教の基礎」の授業を続けて来て、現在の私は、学問探求の場としての大学の授業においてはこのような形でキリスト教について語ることが一番よいのではないか、と思うに至っている。この100年の聖書学の研究成果を無視して教義のみを語ることは学問の場としての大学には相応しくないし、教義を無視して歴史研究としての聖書学の知見のみを語ることは「人間の生き方」の問題を問い掛けるキリスト教(そしてその創始者としてのイエス)の中心的メッセージを伝えてはいないことになるからである。

そして私がこのように考えるに至った何よりも大きな理由は、本稿冒頭にリアクションペーパーを引用したような学生の存在である。学生たちは、たとえ歴史上のイエスの姿が教義の教えるキリストの姿と異なっていることを知っても、『レ・ミゼラブル』のジャン・バルジャンのような生き方 --- 回心によって自らの罪を悔い改め、新たに生まれ変わって生きる生き方 --- を自分の生き方の問題と繋げて考える能力をもっている。否、学生たちは、「歴史的存在としてのイエスの人格そのものの中に、キリスト教の教義を生み出す何かがすでに宿っている」ということ --- 史的イエスと信仰のキリストとの連続性 --- まで、心のどこかで感知しているのかもしれない。私たち教師は、このような学生たちの能力を信頼しなければならない。そして、キリスト教という宗教のもっている本当の力は、学生たちにこのような問題を考えさせるところに存すると思うのだ。

みずおち・けんじ (所員)

今村正夫

客員研究員として迎えられてから白金キャンパスを楽しませていただいています。パレットゾーンやヴォーリス広場は研究のストレスを和らげ、正門近くの三つの歴史的建造物は来るたびに目を奪われちょっとした「観光」気分にはさせられています。最近では、私が牧しています代官山教会堂の建築が始まるため、キャンパスの「建物」に目を留めるようになりました。そして建物について思い巡らしていると建物がそれぞれ思想を持って環境に良い影響を与えていることを知らされています。特にチャペルは興味深い。

日本基督教団代官山教会は新しい教会堂を建設中です。2013 年内の完成を目指しています。かつてあった旧会堂の土地から 100m程移転しての建設です。会堂には機能性、利便性はもちろん、思想が大切だと私は思っています。今回の会堂建築にあたり只今、十字架の有無を含む教会の外壁を思想の点でどうするかを思案しているところです。

代官山教会の話をしみますと、代官山教会は日本組合基督教会本部の設立認可を受けて、1917 (大正 6) 年に麻布ではじまりました。後に代官山町に移転し、1 万円で購入した 304 m² (約 92 坪) の土地の上に建築費 6 千円、付属費用 1 千 8 百円、不足分借入の予算で、1929 (昭和 4) 年 2 月に献堂されました。設計士中村鎮氏 (他に教会では日本基督教団弓町本郷教会、同大阪島之内教会などを設計。建築界では有名な人だったようです) の指揮と工事者谷川治作氏 (ご令孫が今回の代官山教会を設計監理) の督励を得て建てられた木造の会堂でした。1 階 176.43 m² (約 53.4 坪)、2 階 87.99 m² (約 26.6 坪)。この会堂には牧師館が附設され、ここに歴代牧師とその家族が住みました。私は九代目になります。また教会玄関の上には礼拝堂を見下ろすことができる 2 階席がありました。東京大空襲にも耐えた歴史を持つ会堂も耐震問題から昨年解体されてしまいました。

この会堂には二つの思想がありました。一つはノアの箱舟です。会堂は縦長の建物で、しかも土地の形に合わせられていました。長い歴史の中で「ノアの箱舟の教会」と呼ばれてきました。箱舟に乗って 83 年の旅をしてきたかのようです。

もう一つは無装飾主義です。これは設計士中村鎮氏の思想でした。献堂時の写真を見ますと内も外も素っ気ない。妻が作る減塩の味噌汁みたいです。後に十字架が付けられましたが、完成からしばらくの間、屋根にも礼拝堂にも十字架がありませんでした。

た。徹底した無装飾の会堂は意外にも教会員や地域の人々に人気があったようです。地域に受け入れられ人心を収攬した無装飾主義には感心させられます。

白金キャンパスのチャペルは W.M.ヴォーリズさんの設計ですね。関西では彼の作品をよく見てきましたが、ここにも彼のゴシック様式が。とても素敵です。このチャペルの特徴の一つは十字架と思われます。まずは屋根の上の十字の多さ。これは十字架なのか、そうではないのか。訝しく思うところです。また上から見ると十字架の形をしているとのこと。両袖は昭和 6 年の拡張工事とのことで、それが良因となり空襲にも耐えたとか(?)。ステンドグラスにも黄色の十字架。また十字と言えば本館外壁。こちらの建物の外壁はたくさんの十字模様。見ていて楽しいです。これは息子のお気に入り、建築士の夢を持つ息子はこれは面白いと言っていました。こんどの教会もこうしたらと彼に勧められています！

建物は環境に影響を及ぼしています。白金の三つの歴史的建造物であるチャペル、記念館、インプリー館はキャンパスを引き立てています。そう思い代官山教会の新会堂も代官山に良い影響になればと考えています。会堂から思想が汲み取れ、人に愛されるような魅力的な建物にしたい。会堂と言えば十字架です。けれどもちょっと立ち止まってみたい。十字架が地域にどのような影響を及ぼしているのか丁寧に視ることも大切でしょう。十字架がなかった代官山教会のように。白金のチャペルの十字を見ながら考えさせられています。奇をてらうやり方もいい。でも現実はどうか。やっぱり十字架があったほうがいい。いろいろ考えながら白金キャンパスを歩いています。

いまむら・まさお (客員研究員)

「山」と「川」のあいだ

高井ヘラー由紀

私には現在、9才、6才、3才になる子どもがいる。これまで子育てをずいぶんと優先させてきたせいと、もともと研究能力が飛び抜けて高いというわけでもないため、研究者としてはゆっくりとした歩みをしてきた。しかし、子育てに多くの時間をかけてきた分、近所の公園、幼稚園、小学校などで、他人の子どもたちと日常的に接触し、たくさんの母親たちと知り合う機会を得てきたことは、非常に興味深い社会体験であったと言わなくてはならない。

数えきれないくらい多くの印象深い経験を通して考えさせられたことはいろいろあるが、そのうちの一つだけについて、ここに書いてみたいと思う。

最初の子どもが生まれてしばらくしてから私が興味を惹かれたのは、男の子と女の子とは、赤ん坊といえる段階から非常に大きな違いがあるという事実である。こんな風には書きたくないのだが、3才前の子どもであっても、確かに全体的な傾向として、男の子はじっとしておらず、食べるのも忘れて遊びに夢中になるのであり、一方、女の子は、食事時になるとちゃんとテーブルについて、ちまちまと食べ、おしゃれとおしゃべりが好きである。無論、物静かな男の子も入れれば、活発な女の子もいるし、ボーダーラインが決まっている訳ではなく、中間地点にいてどっちつかずの自分に悩む人があるというのも事実であるから、あくまでも、全体的な傾向の話である。

昨年、当時5才(年中)だった次男の幼稚園の保育参観日、子どもたちが、小さな折り紙でつくられたピンク系またはブルー系のお花のセットを選び、丸く切った画用紙に貼付けてアジサイをつくる、という作業をしていた。先生の言葉に従って、ブルー系のお花で作りたい子どもと、ピンク系のお花で作りたい子どもが、それぞれ列に並んだが、ブルー系は7-8割が男の子、ピンク系は7-8割が女の子であった。なぜ男の子はブルーに惹かれ、女の子はピンクに惹かれるのか、というのも興味深いだが、そのときに母親たちの関心をひいたのは、ブルー系に並んだ女の子が概して活発と思われる女の子たちであって、ピンク系に並んだ男の子が概してもの静かで優しいと思われる男の子たちであったということである。

どうしてこのようなことが私にとって面白いのかというと、「男女は平等である」という子どもの頃からの教育が、ナイーブな私の中では、「性差」というものはあっても無視できるはずのものだ、という無意識の思い込みにつながっていたからだろう。平均的な女性と比べると「男勝り」だった私は、社会に出てバリバリ働くつもりだったし、正直「お母さんになりたい」などと考えたことはない。しかし大学院レベルにな

ってようやく、実際には男女平等ではない日本社会では、女性は「強さ」よりは「臨機応変さ」が求められるのであって、自分はそれを持ち合わせていないのだと気付いたわけである。しかも、出産した私を待っていたのは、自分ではコントロールできない「母性」本能であった。専業主婦である母に育てられ、親類の女性も全員専業主婦であり、博士号取得後も職が見つからず、さらに母性本能の縛りからか子どもを他人に預けられなかった私にとって、子どもを保育園に預けて働くという選択肢はなく、悶々とする時期が長く続いた。

と、少々話がシリアスになってしまったが、そういうわけで、毎日毎日、飽きるほど近所の子どもたちを見続け、家事をしたり子どもの相手をしたり母親仲間とおしゃべりをしているうちに、性差はあるという当たり前の現実が、この社会においてどのような意味を持つのかについて、考えさせられるようになった。たとえば以前は、昔話によくでてくる「おじいさんは山へしば刈りに、おばあさんは川でおせんたく・・・」という下りの意味を考えたことはなかった。考えたとしても「女だってしば刈りはできる」で終わっていただろう。しかし、幸いにも非常勤講師とキリ研での客員研究員の職を与えられ、毎日へとへとになって（夫との分業体制ではあるが）家事と子ども相手をやっている今では、女性が「川」を担当した方が、おそらく多くの場合に双方にとって楽なのだろうな・・・などと納得させられてしまうのである。

そういった、ジェネラルな意味での性差による適性の違いがあるという事実をようやく受け入れられるようになって今考えることは、それでも、男性が家事や子育てに従事でき、女性が仕事に従事できるシステムがあるべきだということである。たとえば、ヨーロッパのどこかの国のように、夫婦でも夫と妻が週の半分ずつ働くことができれば、いずれもが仕事もでき、日々成長し変化する子どもとも十分な時間を過ごすことができる。そんなシステムがあれば、「山」と「川」の区分をそんなに律儀にしなくても良くなるはずだ。

以上は私の個人的な経験に基づく考えに過ぎない。でも、ジェンダー研究をしてみたら山ほど論文が書けるだろうな、とは思ったりする。だって私は、ここ10年ほど毎日、ジェンダー研究者がやりたくてもやれないようなフィールドワークをしてきたようなものなのだから・・・。

たかいへらー・ゆき（客員研究員）

今回の雑録を書くのに骨が折れました。とても含蓄のある文章ばかりで、とてもコメントを付せることができないからです。多少的外れになっていると思いますが、お許しくださいませ幸いです。

今回の執筆者は退職なさる先生、任期を終えられる先生が多かったです。遠藤興一先生（社会学部・教授）は、定年で退職されます。また、水落健治先生（文学部・教授）も退職されます。高井ヘラー由紀先生、今村正夫先生もキリスト教研究所の客員研究員の任期を終えられます。先生方がこのアンゲロスに寄稿なさった文章は、先生方の魂が込められた、先生方自身を投影しているような、そんな迫力のある作品となっています。

遠藤興一先生は、ボランティア活動を例にとって、その無償性と有償性について述べてくれました。昔は手弁当でボランティアをするのは当然のことでしたが、1980年代から何らかの見返りを求める有償性（互酬性）がボランティア活動の原則に組み入れられてきたというのです。これはキリスト教社会福祉でも同じであると先生は言われます。今やキリスト教社会福祉もこの有償性に一步踏み出し、一方では無償性の持つ意味をもう一度見直す必要があると先生は述べられます。奉仕の精神は、福祉の基本であるとともにキリスト教の愛の精神の具体化でもあります。ひとえに「他者への貢献」というけれども、それは決して人におしつけるものではないでしょう。人間は自分の本心を裏切れない。自分のできる範囲を超えて行っても、それは自己の分裂になってしまい、愛の力もうせてしまうのではないのでしょうか。ありのままの自分を受け入れ、可能な範囲で表現する。そうした自然の感情が奉仕の精神の根本ではないかと気づかされました。

水落健治先生は、26年間担当した「キリスト教の基礎」の講義を振り返り、「史的イエスと信仰のキリストとの乖離」について、大学教師としての葛藤を語ってくれました。大学は学問の場であるから最新の聖書学にも触れなければならない。しかし、それだけではキリストの本質に触れたことにはならない。そこにはイエスのメッセージに触れた講義をしたという先生の熱い想いが感じられました。先生の最後の授業で、学生が書いたリアクションペーパー、そこには先生の想いを感知した学生の姿が映し出されていました。「歴史的存在としてのイエスの人格そのものの中に、キリスト教の教義を生み出す何かは既に宿っている。」先生のメッセージ、心に刻みます。

今村正夫先生は、建物から思想がくみとれることを述べました。今、今村先生の教会、日本キリスト教団代官山教会は、会堂建設中だそうです。古い会堂は中村鎮氏の設計で、それは無装飾でシンプルなものでした。これは会衆に重きをおき、講義所を

強調する、会衆派の伝統にそうものだそうです。明治学院のチャペルは、W.M.ヴォーリズ氏の設計で、ゴシック様式で建てられているそうです。その特徴は屋根の上の十字架にあるそうです。明治学院に学ぶ学生は、この十字架からどんな思想を読みとったのでしょうか。

高井ヘラー由紀先生は、家事や子育てのご経験をから、性差の違いについて述べられました。幼稚園の保育参観の光景、男の子はブルー系の折り紙を、女の子はピンク系の折り紙を選ぶ傾向があるということです。先生は、女性でも男性と対等に仕事ができと思っていたそうです。しかし、自分ではコントロールできない母性によって、女性を意識させられたと言われました。そして、「性差による適性の違いはある」ということを受け入れたそうです。昔話の「おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは川に洗濯に行きました。」です。しかし、それをふまえてもなお、先生は「男性が家事や育児に従事でき、女性が仕事に従事できるシステムがあるべきだ。」と言われます。「山」と「川」のあいだをつなぐ何かを探していらっしゃるようです。

今回の寄稿では、先生方のご自身のテーマを語っていただきました。しかも本音で語っていただきました。そこには無償性と有償性、史的イエスとキリストへの信仰、性差に関する現実とこれからの期待、がありました。すべて人間が生きることへの本質に触れるものでした。

退職、退任の先生は、明治学院大学キリスト教研究所に多大なる軌跡を残してくださいました。水落先生、遠藤先生は主任としてご活躍されました。その存在感はキリスト教研究所になくてもはならないものでした。

先生方のこれからのご健康とご活躍をお祈りいたします。主が先生方と共におられますように。

実は私もこれで明治学院大学を退職になります。キリスト教研究所に貢献できたかどうかは分かりません。しかし、私としては、キリストを学として見つめ、キリストのいのちに触れたことは、私の研究に新しい息吹を与えてくれました。

明治学院大学キリスト教研究所のますますのご発展をお祈りいたします。

主イエスキリストの恵み、神の愛、限りなく我ら一同とともにあらんことを。

主イエスキリストの御名によりて こい願いたてまつる。

アーメン

しもだ・よしゆき（主任・心理学部教授）

研究所活動（2013年1月-3月）

所員会議

第7回 開催日時：2013年1月23日（水）14：00- 開催場所：白金校舎キリスト教研究所

第8回 開催日時：2013年2月27日（水）14：00- 開催場所：白金校舎キリスト教研究所

3月研究会

開催日時：2013年3月7日（木）14：30- 開催場所：白金校舎本館 81 会議室

司会：下田好行（主任）

発表□「聖パウロの伝道旅行の舞台、エーゲ海の島々における今日の観光」

発表者：石本東生（協力研究員） コメントーター：渡辺祐子（所長）

発表□「キリスト教と社会福祉のあいだ」

発表者：遠藤興一（所員） コメントーター：司馬純詩（所員）

※研究会終了後懇親会開催

公開研究会

白金文学研究プロジェクト

第1回 開催日時：2013年2月23日（土）13：00- 開催場所：白金校舎キリスト教研究所

発表題：「加藤一夫初期文学作品の本質と背景をめぐって—〈信仰〉への揺らぎと明治学院—」

発表者：大和田茂（日本社会文学学会代表理事、法政大学非常勤講師）

第2回 開催日時：2013年3月16日（土）13：30- 開催場所：白金校舎キリスト教研究所

発表題：「木下尚江の文学的影響—『良人の自白』を中心に—」

発表者：岡野幸江（法政大学非常勤講師）

新着図書

- ・『福音と世界』No.1、新教出版社、2013。
- ・『福音と世界』No.2、新教出版社、2013。
- ・『福音と世界』No.3、新教出版社、2013。
- ・『3・11 後を生きるキリスト教 プルトマン、マルクス、パッハから学んだこと』川端純四郎著、新教出版社、2013.1.30。
- ・『キリスト教と社会の危機 教会を覚醒させた社会的福音』ウォルター・ラウシェンブッシュ著、山下慶親訳、新教出版社、2013.1.14。
- ・『山本とその時代—伝道者から教会史家へ』岡部一興著、教文館、2012.11.30。
- ・『社会運動と文芸雑誌—『種蒔く人』時代のメディア戦略—』大和田茂著、菁柿堂、2012.5.11。

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第60号

2013年3月10日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩